東京大学宗教学年報 XXXVII　特別号（2020 年）219-227 頁

ペッタッツォーニにおける宗教現象学と宗教史学

江川　純一

１．近年のペッタッツォーニ研究について

21 世紀に入ってから，イタリアの宗教史学者ラッファエーレ・ペッタッツォーニ（1883-1959）に関する資料や研究書の刊行が相次いでいる。まず，1989 年に開始された，マリオ・ガンディーニ（ペッタッツォーニの故郷サン・ジョヴァンニ・イン・ペルシチェートのアーカイヴを創設し，長くその代表を務めた）によるペッタッツォーニ「伝記のための資料（Materiali per una biografia）」プロジェクトが 2008 年に完結した [1]。残念ながら大部であるため書籍化は困難であると考えられるが，今後のペッタッツォーニ研究の礎となることは疑いない。また，ペッタッツォーニ各著作の一連の復刊の流れのなかで 2020 年には，ローマ大学における 1950-51 年の講義録 [2]が復刊された。同書では古代，キリスト教の護教論，ヴィーコ，マックス・ミュラー，タイラー，ウーゼナー，マリノフスキ，レヴィ=ブリュルの各神話論が扱われており，特にヴィーコに重きが置かれている。

加えて往復書簡集に関しても，それまでに刊行されていたのは 1994 年のエリアーデとのもの [3]のみであったが，2006 年に民間伝承研究のジュゼッペ・コッキアラとのもの [4]，2014 年にペッタッツォーニ著作集の英訳者であるイギリスのハーバート・ジェニング・ローズとのもの [5]，2015 年には弟子にあたる宗教史学者・民族学（民俗学）者，エルネスト・デ・マルティーノとのもの [6]が相次いで刊行された。

研究書については，ペッタッツォーニが教鞭を執ったローマ大学の研究者によるもの

---

[1] Gandini, M., « Raffaele Pettazzoni negli anni 1958-1959. Materiali per una biografia », in : *Strada maestra*, 65, San Giovanni in Persiceto, Biblioteca Comunale G.C.Croce, 2008, pp. 1-230.

[2] Pettazzoni, R., (a cura di alcuni studenti), *Mitologia e monoteismo,* Milano: La Vita Felice, 2020(1951).

[3] Spineto, N. (a cura di), *Mircea Eliade, Raffaele Pettazzoni, L'histoire des religions a-t-elle un sens? : correspondance 1926-1959*, Paris: Cerf, 1994.

[4] D'Amato, A. (a cura di), *Giuseppe Cocchiara – Raffaele Pettazzoni, Lettere (1928-1959)*, Palermo: A.C.Mirror, 2006.

[5] Accorinti, D. (ed), *Raffaele Pettazzoni and Herbert Jennings Rose, Correspondence 1927–1958*, Leiden: Brill, 2014.

[6] Di Donato, R., Gandini, M. (a cura di), *Le intrecciate vie. Carteggi di Ernesto De Martino con Vittorio Macchioro e Raffaele Pettazzoni*, Pisa: Edizioni ETS, 2015.

[7]やサン・ジョヴァンニ・イン・ペルシチェートのアーカイヴ関係のもの[8]が中心となるが，神学校で教える研究者がペッタッツォーニとその弟子たち（ブレリチ，ビアンキ，ランテルナーリ）の仕事を高く評価したという点で，ミエルチッチの著作[9]が注目に値する。さらには，英語圏におけるペッタッツォーニの意義を訴えた論文[10]まで発表されている。

本稿では，上記の資料も参考にしながら，2015 年の拙著[11]の延長線上で，ペッタッツォーニにおいて，宗教史学と「宗教現象学」はどのような関係にあったのかについて考えてみたい。

２．ペッタッツォーニ宗教史学における最高存在研究

はじめに基礎的な情報を記しておきたい。ペッタッツォーニが生前に刊行した単著は大きく三つのグループに分けられる。まず，ある地域における（諸）宗教の歴史的展開を追った研究である（グループα），最初の著作である『サルデーニャの原始宗教』（1912 年）[12]，『ツァラトストラの宗教――イラン宗教史』（1920 年）[13]，『古代ギリシアの宗教――古代末期からアレキサンドロス大王まで』（1921 年）[14]，『秘儀――宗教史学論集』（1924 年）[15]，『日本の神話――『古事記』より』（1929 年）[16]などの，彼からみた「東方」が対象とされた初期の著作群である。時代は離れるが『宗教のイタリア』（1952

---

[7] Severino, V. S., *La religione di questo mondo in Raffaele Pettazzoni*, Roma: Bulzoni, 2009., Sacco, L., *L'ideale di liberta e di tolleranza. Raffaele Pettazzoni (1883-1959) e la coscienza storico-religiosa degli italiani*, Roma: Lithos, 2016.

[8] Basello, G. P., Ognibene, P., Panaino, A. (a cura di), *Il mistero che rivelato ci divide e sofferto ci unisce. Studi Pettazzoniani in onore di Mario Gandini*, Milano-Udine: Mimesis, 2013.

[9] Mihelcic, G., *Una religione di libertà. Raffaele Pettazzoni e la scuola romana di storia delle religioni*, Roma: Città Nuova, 2003.

[10] Rennie, B., « Raffaele Pettazzoni from the Perspective of the Anglophone Academy », in: *Numen*, 60, 2013, pp. 649-675.

[11] 江川純一，『イタリア宗教史学の誕生――ペッタッツォーニの宗教思想とその歴史的背景』，勁草書房，2015 年。

[12] Pettazzoni, R., *La religione primitiva in Sardegna*, Piacenza: Società Editrice Pontremolese, 1912.

[13] Pettazzoni, R., *La religione di Zarathustra, nella storia religiosa dell'Iran*, Bologna: Zanichelli, 1920.

[14] Pettazzoni, R., *La religione nella Grecia antica fino ad Alessandro*, Bologna: Zanichelli, 1921.　1954 年に改訂版が刊行された。註 24 を参照のこと。

[15] Pettazzoni, R., *I misteri. Saggio di una teoria storico-religiosa*, Bologna: Zanichelli, 1924.

[16] Pettazzoni, R., *La mitologia giapponese, secondo il libro del Kojiki*, Bologna: Zanichelli, 1929.

年）[17]もこちらのグループに加えることができる。

次に，ある主題をめぐる大部の著作である（グループβ），『神――一神教の形成と展開：第一巻 原始人の信仰における天空存在』（1922 年）[18]，『罪の告白』（1929-1936 年）[19]，『神話と伝説』（1948-1953 年）[20]，『神の全知』（1955 年）[21]，そして『神の全知』のダイジェスト版ともいえる『原始宗教における最高存在』（1957 年）[22]が含まれる。最後に（三つ目として）論文集が挙げられる[23]。

グループαの研究に共通するのは，「宗教史学（Storia delle religioni）」の名称が示す通り，事象の歴史的コンテクストが重要視されている点である。後に「あらゆる（宗教）現象は（歴史的）生成である（ogni phainómenon è un genómenon）」[24]という言葉で要約されることになるが，「歴史的生成物としての宗教」という理解に基づき，19 世紀的な宗教進化論と，ヴィルヘルム・シュミットによる原始一神教説を，どちらも研

---

[17] Pettazzoni, R., *Italia religiosa*, Bari: Laterza, 1952.

[18] Pettazzoni, R., *Dio: formazione e sviluppo del monoteismo vol. I: L'Essere celeste nelle credenze dei popoli primitivi*, Bologna: Zanichelli, 1922. オーストラリア，アンダマン諸島，マラッカ，インドネシア，メラネシア，ミクロネシア，ポリネシア，アフリカ，南アメリカ，中央アメリカの事例が扱われている。『原始人の信仰における天空存在』，『多神教における最高神』，『一神教における唯一神』という三部作が構想されていたが，実現しなかった。

[19] Pettazzoni, R., *La confessione dei peccati, I: Primitivi - America Antica - Giappone - Cina – Brahmaneismo - Giainismo - Buddhismo*, Bologna: Zanichelli, 1929., *La confessione dei peccati, II: Egitto - Babilonia - Israele - Arabia Meridionale*, Bologna: Zanichelli, 1935., *La confessione dei peccati, III: Siria - Hittiti - Asia minore - Grecia*, Bologna: Zanichelli, 1936. 未開，古代アメリカ，日本，中国，バラモン教，ジャイナ教，仏教，エジプト，バビロニア，イスラエル，シリア，ヒッタイト，小アジア，ギリシアの事例が扱われている。

[20] Pettazzoni, R., *Miti e leggende, I: Africa, Australia*, Torino: Unione Tipografico-Editrice Torinese, 1948., *Miti e leggende, III: America settentrionale*, Torino: Unione Tipografico-Editrice Torinese, 1953. アフリカ，オーストラリア，北アメリカの事例が収められている。第二巻と四巻は死後に弟子たちによって刊行された。

[21] Pettazzoni, R., *L'onniscienza di Dio*, Torino: Einaudi, 1955. アフリカ，エジプト，バビロニア，フェニキア，イスラエル，ヒッタイト，インド，イラン，ギリシア，ローマ，トラキア，ケルト，ゲルマン，スラヴ，ウラル＝アルタイとシベリア，中国，アッサムとビルマ，ネグリト，インドネシア，オセアニア，オーストラリア，北アメリカ，メキシコと中央アメリカ，南アメリカの事例が扱われている。

[22] Pettazzoni, R., *L'essere supremo nelle religioni primitive,(L'Onniscienza di Dio)*, Torino: Einaudi, 1957.

[23] Pettazzoni,R. Raffaele Pettazzoni, *Saggi di storia delle religioni e di mitologia*, Roma: Edizioni Italiane, 1946., (translation by Rose, H. J.), *Essays on the history of religions*, Leiden: E.J.Brill, 1954.

[24] Pettazzoni, R., *La religione nella Grecia antica*, Torino: Boringhieri 1954, p. 11.

究者による机上のシステムに過ぎないとして批判し，宗教史叙述の礎を据えた点にペッタッツォーニの「功績」があるだろう。

グループβの各著作では天空存在，罪の告白，神話，伝承といった主題をめぐって古今東西の膨大な事例が集成されており，それらは現在においても資料的価値を有する。だが，単なる事例の地域別の提示にとどまっており，総合的考察を欠くという問題点を抱え持っている。

グループαとグループβを貫いているのは最高存在という主題である。ペッタッツォーニは日露戦争によって日本に興味を持ち，日本の宗教について調べることで宗教研究を開始した。彼が最初に書いた論考は，1904 年の「日本の諸宗教」[25]である。神道に関する記述のなかで彼は「第一のそして根源的な教義とは，創造神である天之御中主神，すなわち"dio signore del centro del cielo"への信仰である」[26]と書いている。「創造神である天之御中主神」への着目（当然これは Deus otiosus の問題系へと繋がっていく）は，「天空存在（l'essere celeste）」概念へと拡大され，1912 年の『サルデーニャの原始宗教』における古代サルデーニャの最高存在サルドゥス・パテルへと引き継がれる。同書においてペッタッツォーニは，「天空存在」と同義のものとして「最高存在（essere supremo）」の語を使用し，「（最高存在の理念とは）神話的起源の法則，もしくは神話的擬人化であるところの統覚・類化（appercezione）である」と述べ，最高存在が自然の擬人化によるものであることを明らかにしている（Pettazzoni, 1912, p. 223）。

ペッタッツォーニは「宗教は人間の生に最も密接に結びついている」（Pettazzoni, 1912, p. 129）として，人間を研究する際に「宗教」が最重要だと主張する。しかしながら，その根拠が示されることはない。ペッタッツォーニの「歴史的生成物としての宗教」という理念に従うならば，宗教と人間の生との結びつき自体を歴史化しなければならないはずである。この部分が彼の研究のなかで最も面白い部分となったはずだが，ペッタッツォーニにおいて，「宗教」と「宗教史学」が重要であることはア・プリオリのものとされてしまっている。

1915 年に完成し，1922 年に刊行された著作『神』において，最高存在（天空存在）

---

[25] Pettazzoni, R., «Religioni del Giappone», in: *Il Resto del Carlino*, lunedì 29, Febbraio-Martedì 1 Marzo, 1904.

[26] " dio signore del centro del cielo "の語は，チェンバレンによる『古事記』英訳における"the Deity Master-of-the-August-Centre-of-Heaven"に由来する(translated by B. H. Chamberlain, *The Kojiki*, CSIPP, 2012(1883), p. 5)。1929 年のペッタッツォーニの著作『日本の神話――『古事記』より』では，" Signore del sublime polo del cielo "の語が採用されている。Pettazzoni, 1929, p. 37. なぜペッタッツォーニは神道を重視したのか。彼はこのように説明している。多神教的で自然崇拝的な国家宗教は，エジプト，バビロニア，インド，ギリシア，ローマといった古代宗教の典型であり，西洋世界ではすべて消滅している。現在，オシリスやインドラやアポロンやミネルヴァやイシュタルやアルテミスの実在を信じる者はいないだろう。しかし，アマテラスは現在もなお日本の人々の信仰や崇拝の対象である。しかも，日本人は文明人なのである。そのような訳で，宗教学や宗教史学にとって神道は極めて興味深い対象であると。Pettazzoni, 1929, pp. 3-4.

研究はさらに展開される。雨・虹・雷鳴・稲妻・稲光・雪といった現象が分析され，天空存在は「神話的思考――それは原始宗教のあらゆる形態において中心的な役割を果たす――にしたがい，空を人間の姿をした存在として知覚したもの」（Pettazzoni, 1922, p. XVI）と捉えられている。さらに，ペッタッツォーニは天空存在の倫理的側面に着目し，「天空存在は，慣習の管理者，部族の法の制定者，人間の行動の裁定者，違反にたいする厳密な復讐者である」（Pettazzoni, 1922, p.XVIII）と述べる。この部分が，膨大な事例集成である『神の全知』（1955 年）を準備することとなる。そこでは，天空の超越性こそが宗教における「超越」概念の基礎であり，天空存在の「すべてを見通す力（onnivegenza）」が神の「全知（onniscienza）」という属性を生み出したとされるのである。

さらに，最後の著作『原始宗教における最高存在』（1957 年）では，最高存在概念が拡大されて，理念型として「天の父（il padre celeste）」（天空，太陽の擬人化）／「地の母（la terra madre）」（大地の擬人化）／「動物の主（il signore degli animali）」（動物と人間のアマルガム）の三つが提出される（性別が逆の場合，両性の場合，無性の場合があるとされる）。最高存在概念によって，キリスト教の神と「原始宗教」の神が同じカテゴリーに入れられたうえで，一神教は多神教の環境を前提とする歴史的形成物であり，「進化（evoluzione）の結果ではなく，宗教史における革命（rivoluzione）」（Pettazzoni, 1957, p. 241）であるとされた。一神教と多神教の優劣は議論しない（議論できない）とするペッタッツォーニのような主張が，半島内に教皇庁を抱えるイタリアから出てきた点が，近代宗教思想研究の最も面白い部分のひとつであるといえる。

３．ペッタッツォーニにおける宗教現象学

では，ペッタッツォーニにおいて宗教現象学とは何だったのだろうか。まず取り上げたいのが，『イタリア百科事典』における記述である。ペッタッツォーニは，1925 年に刊行が開始された，ファシスト政権の国家的事業『イタリア百科事典（Enciclopedia Italiana）』の宗教史学とフォークロアのセクションを担当した（1937 年まで）。「宗教史学」の項目において，彼はこう書いている。

「一方で，歴史主義の行き過ぎと欠陥にたいし，最近では宗教史叙述のなかにも反歴史的な潮流がみられるようになった。非合理主義的理論として最も重要なものは F・シュライアーマヒャー（『宗教について』，1799 年）によるもので，宗教とは認識でも行為でもなく，自己意識の直接的所与としての「感情」の特定の形であるという F・シュライアマハーの概念は，R・オットー（『聖なるもの』，1917 年）によって取り上げられ，展開された。宗教とは聖の「ヌミノーゼ的な」経験であり，還元不可能な「固有の類としての sui generis」ものだとするのである。オットーはこの理論を特にインドの宗教に適用した。その肯定的な意義は何よりも宗教的事実の心理学的掘り下げにある。」[27]

「この心理主義は，多かれ少なかれ，F・ハイラー（『祈り』，1918 年），J・W・ハウア

[27] Pettazzoni, R., « La storia delle religioni », in: *Enciclopedia Italiana*, 29, Roma, 1936, p. 32.

ー（『宗教』第一巻，1923 年），H・フリック，G・メンシングなどの著作においても強調された。（中略）さらに，この反歴史的な流れは現象学にも共通する（G・ファン・デル・レーウ『宗教現象学』，1933 年）。」Pettazzoni, 1936, p. 32

歴史主義の立場に立つ宗教史学とは異なる「反歴史」的な流れについて，概して否定的な評価が与えられることは，1924 年の宗教史学講座の開講講演[28]以来一貫している。一方で，「掘り下げ（approfondimento）」の語が示すように，歴史主義からは得られない部分についても明確に指摘されている。ただし，彼が「現象学」という名称のもとで取り上げているのは，ファン・デル・レーウだけであることは注意しておきたい。

1946 年の論文集『宗教史学と神話学論集』において，「シンクレティズムと改心」，「国家的宗教，超国家的宗教，秘儀的宗教」，「日本の国家宗教と，日本国家の宗教的政治」の三論文から成る第三部のタイトルに「宗教史学的現象学（fenomenologia storico-religiosa）」の語が使用されていることが目を引くが，「宗教現象学」が特に意識された内容とはなっていない。変化が訪れるのは 1950 年代である。宗教史学というディシプリンをイタリアで立ち上げた時からずっと，宗教現象学との差異を強調することで自身の宗教史学の意義を強調していたペッタッツォーニであるが，1954 年には以下のように書いている。

「何が起こったのか，それらの諸事実はどのように生み出されたかについて，正確に認識することはできないといわれてきた。何よりもまず，それらが起こった「意味」を認識しなければならないとされたのである。より深いこの認識にわれわれは宗教史学から達することはできない。それは宗教学の他の方法，すなわち宗教現象学に属するものである。

宗教現象学は宗教の歴史的発展を無視する（「宗教の歴史的発展について現象学は何も知らない」ファン・デル・レーウ）。宗教現象学がとりわけ目標とするのは，宗教現象の多面性のなかから様々な構造を取り出すことである。その構造だけが，時間と空間における現象の位置や，現象に付随する所与の文化的環境から独立しているため，宗教現象の意味を明らかにする手助けとなりうる。こうして宗教現象学は普遍的妥当性を獲得するのである。それは，個別宗教の研究に没頭することで，特殊化という分断を余儀なくされる宗教史学に欠けているものである。本質的に宗教史学とは異なる固有の類としての（sui generis）科学として，宗教現象学は存立するのである（「宗教現象学は宗教史学ではない」ファン・デル・レーウ）。」[29]

現象の「意味」について考える際に宗教史学では不充分であるとして，『イタリア百科事典』において「反歴史的」と捉えられていたアプローチにたいし，一転して評価が与えられているのである。1959 年の以下の記述も合わせて読む必要がある。

---

[28] Pettazzoni, R., *Svolgimento e carattere della storia delle religioni*, Bari: Laterza, 1924. 開講講演の内容については拙著，2015 年，67-73 頁を参照のこと。

[29] Pettazzoni, R., « Aperçu introductif », in: *Numen*, 1, Leiden, 1954, pp. 3-4.

「歴史主義的思考の中心には展開の理念があるが，その一方で歴史主義は現象学にとって根本的である自律的な価値としての宗教という認識に無縁であった。宗教を固有の類としての（sui generis）経験とする，この「自律的な価値としての宗教」という概念は，宗教研究の特別な方法，すなわち言語学，文献学，人類学といった他の学問からの借り入れではない現象学の方法の基礎となっている。この方法論的要請もまた歴史主義にはなかったものである。」[30]

そして以下のような主張に至る。

「現象学と歴史主義を統合し，片側のみの立場を超えることが重要である。それは，展開という歴史的概念を備えた宗教現象学，つまり，宗教の自律的な価値という現象学の要請を備えた歴史主義的歴史記述を発展させ，歴史における現象学に至ることで実現する。同時にそれは，歴史科学の性格を備えた宗教史学として認識される。」Pettazzoni, 1959, p. 14

「宗教の自律的な価値」が持ち出され，宗教史学と宗教現象学の相互補完性が主張されるのである。この主張に基づく著作がペッタッツォーニによって書かれることはなかった。

こうした言説が発表されたのはすべて『ヌーメン』誌上であったことはやはり見逃せない。ペッタッツォーニが，ファン・デル・レーウの死去を受け 1950 年に国際宗教史学会会長に就任し，実証主義的研究と「隠れ神学的」研究[31]との分裂回避に努めたことが大きく関係していると思われる[32]。たいへん興味深いことに，ほぼ同時期に，ペッタッツォーニは自筆ノート[33]（1958-59 年）にこのように書いている。

宗教史学の敵
敵その 1！神学
その 2．心理主義

---

[30] Pettazzoni, R., « Il metodo comparativo », in: *Numen*, 6, 1, Leiden, 1959, p. 10.
[31] 「近代的宗教学」における「crypto-theology」については，鶴岡賀雄の示唆による。
[32] この問題は学問の名称変更論を生み出すことになる。拙稿「ペッタッツォーニの「サクロロジア」」，『ニュクス』，第 5 号，2018 年，66-77 頁を参照のこと。
[33] サン・ジョヴァンニ・イン・ペルシチェート，ペッタッツォーニ文庫（Fondo Pettazzoni）蔵（マリオ・ガンディーニ氏の協力による）。ペッタッツォーニの死の翌年，最晩年の 1959 年のノートを，弟子でありペッタッツォーニの講座を引き継いだ，アンジェロ・ブレリチが発表した。(a cura di Brelich, A.), « Gli ultimi appunti di Raffaele Pettazzoni », in：*Studi e Materiali di Storia delle Religioni*, 31, 1960, pp. 23-55. さらに未公開分を 2008 年にマリオ・ガンディーニが発表した。Gandini, M., « Raffaele Pettazzoni negli anni 1958-1959. Materiali per una biografia », in：*Strada maestra*, 65, San Giovanni in Persiceto, Biblioteca Comunale G.C.Croce, 2008, pp. 1-230.

その 3．現象学
その 4．文献学

ここに挙げられた「現象学」とは何を指すのか。また「その 4．文献学」も不明である（自身の学問は「文献学」ではないのか？）。すべての一次資料の閲覧が可能となった今，1950 年代のペッタッツォーニ[34]についての研究が求められる。

第一章で述べたペッタッツォーニの単著の分類とは別に，ペッタッツォーニには大きく二つの傾向が存在することがみえてきた。ひとつは歴史的コンテクストと「因果」を重視する「歴史主義的傾向」，もうひとつは「類似」と「接触」を重視する「形態論的傾向」である。実際，『原始宗教における最高存在』（1957 年）[35]の第 2 章のタイトルは「形態論（Morfologia）」である。先に触れた「天の父」，「地の母」，「動物の主」を三つの理念型として古今東西の事象（古代中国やギリシアから，アフリカやアンダマン諸島まで）を挙げていく，フレイザー的ともいえるその手法は，歴史的コンテクストを最重要視したペッタッツォーニのそれまでの研究とは異なる様相を呈している。この最晩年の動きを「現象学的傾向」と捉えてよいのかどうかを検討することが今後の課題となる。

また，いうまでもなく「因果」，「類似」，「接触」はデイヴィッド・ヒュームの観念連

---

[34] 死の十ヶ月前にあたる，1958 年 2 月 19 日付けのメモには以下のような言葉がある。「エリアーデは（正教会の）隠れキリスト教神学者である。

彼のテオファニーは（人間イエスのなかの父なる神のように）顕現する超越的な神を当然のこととして含んでいる。それは完全に反歴史的な姿勢である。

いっぽう歴史主義は，聖なるものの根源，聖なるものの外的投影の根源を人間のなかに置く。ダニエルー（引用者註：ジャン・ダニエルー。フランスのイエズス会士，神学者）がエリアーデに熱狂するのも無理はない。」

これを，エリアーデのクリアーヌ宛書簡の言葉（1977 年）の横に並べておきたい。「だれが私の＜師＞あるいは＜模範＞なのかと訊ねられたときは，常に R・ペッタッツォーニであると答えています。そしてそのあとで次のように説明します。私は，なにをなすべきか――どのようになすべきかではなく――を彼から学んだのだと（彼は歴史主義者です）。R・P はその生涯をかけて諸宗教の普遍史を書こうとしました。それは偉大な教訓でした。そのおかげでイタリアには幾人かの諸宗教の歴史家〔宗教史学者〕がいるのです。それに対して，フランス，ドイツ，イギリスにはひとりもいません。」テレザ・クリアーヌ=ペトレスク＋ダン・ペトレスク編『エリアーデ=クリアーヌ往復書簡 1972-1986』（佐々木啓・奥山史亮訳），慶應義塾大学出版会，2015 年，45 頁（訳文は一部変えてある）。

ペッタッツォーニとエリアーデの複雑な関係については，まだ明らかになってはいない。拙稿「ペッタッツォーニの「サクロロジア」」，『ニュクス』，第 5 号，2018 年，66-77 頁を参照のこと。

[35] 「宗教学名著選」（国書刊行会）の一冊として，拙訳が刊行される予定であるが，同書には論文« Aperçu introductif »や« Il metodo comparativo »の翻訳も収める。ペッタッツォーニ，『神の全知――宗教史学論集』，国書刊行会。

合論に由来する[36]。これらはヴィクトリア期の宗教論――特にタイラーとフレイザー――を経由してペッタッツォーニに注ぎ込んでいるものであるが，その歴史的コンテクストの検討はまだ試みられていない。

[36] 「この連合を生み出し，精神をそのようにある観念から別の観念へと導く性質は三つある。すなわち【類似（Resemblance）】，時間と場所における【接触（Contiguity）】，そして【因果（Cause and Effect）】である。」David Hume, *A Treatise of Human Nature: Book I. Of the Understanding*, Oxford at the Clarendon Press, 1888(1739), p. 11.